様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６９８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２１９５

研究課題名（和文）ザムエル・シャイトの複合唱音楽『カンツィオネス・サクレ』に関する研究

研究課題名（英文）Research on Samuel Scheidt's polychoral work "Cantiones Sacrae"

研究代表者
鏑木　陽子（KABURAGI, YOKO）

東京純心大学・看護学部・教授

研究者番号：１０６３８３５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：「ドイツオルガン音楽の父」ザムエル・シャイト（1587-1654）の声楽作品を紹介し、作曲家としてのシャイトを再評価するため『Cantiones Sacre』（1620年）について、以下の各項目を実施した。１．シャイト全集第4巻（1933年）のデジタル画像化、２．筆写譜の調査とデジタル画像化、３．歌詞対訳作成、４．作品研究（『Vater unser im Himmelreich』と『Christe, der du bist Tag und Licht』を中心に）、５．校訂譜の作成、６．校訂譜に基く演奏実践と録音、７．楽曲の伝承に関する調査。３から６までの成果はウェブにて公開を予定している。

研究成果の概要（英文）：Samuel Scheidt (1587-1654) is sometimes referred to as “the father of German organ music.” The purpose of this research is to reevaluate him as a composer by examining his choral composition “Cantiones Sacrae” (1620). The following methods were employed: (1) digitization of “Complete works of Samuel Scheidt, Vol. 4” (1933); (2) examination and digitization of hand-written manuscripts; (3) creation of a bilingual edition (German to Japanese); (4) analysis, focusing on “Vater unser im Himmelreich” and “Christe, der du bist Tag und Licht”; (5) creation of performance editions; (6) performance and recording of the music based on the performance editions; and (7) research on how the music has been passed on. There are plans to release items 3 through 6 online.

研究分野：音楽（オルガン）

キーワード：初期バロック音楽　複合唱　校訂譜　演奏実践

１．研究開始当初の背景

17 世紀に中部ドイツの町ハレを中心に活躍したザムエル・シャイト Samuel Scheidt（1587～1654）は、ハインリヒ・シュッツ Heinrich Schütz（1585～1672）、Johann Hermann Schein ヨハン・ヘルマン・シャイン（1586～1630）とともにドイツの初期バロック音楽を代表する「三大Ｓ」の一人に数えられる作曲家である。「ドイツオルガン音楽の父」とも呼ばれ、とりわけ彼の鍵盤作品はバロック期のドイツのオルガン音楽に影響を及ぼしたとされる。彼の代表作である大規模な鍵盤作品集『タブラトゥラ・ノヴァ Tabulatura Nova』（全 3 巻、1624 年）は、彼が対位法の大家であったことを示している。ドイツ音楽史におけるシャイトの功績はもっぱら鍵盤作品によってのみ評価されてきた。しかし彼が鍵盤作品よりも多くの声楽作品を出版し、また生涯にわたり声楽作品を作曲し続けていたことには関心が払われてこなかった。同時代のシュッツ、シャインの声楽作品に比べて楽曲研究も、また演奏機会も極めて少ないのが現状である。このことは、日本国内のみならず、ドイツにおいても同様である。

ドイツの初期バロックを代表する作曲家シャイトを正当に評価するためには、彼の作曲活動の主要なジャンルである声楽作品に関する調査・研究を行ない、それを踏まえた演奏実践を行なうことが必要である。しかし、シャイトの声楽作品研究の出発点となる彼の最初の出版譜である 8 声の複合唱作品集『カンツィオネス・サクレ Cantiones Sacre』（1620 年）の現代譜（ザムエル・シャイト全集第 4 巻、1933 年）は絶版のまま現在に至り、研究・演奏の妨げとなっている。本研究はシャイトの初期声楽作品の校訂譜を作成し、楽曲研究を踏まえた演奏実践により、これまでのシャイト研究の欠落部分を補い、作曲家としての再評価を行なうため、立案された。

２．研究の目的

本研究の第一の目的は、ドイツ国内に現存するオリジナル資料『カンツィオネス・サクレ』の初版譜（1620 年）に関する詳細な調査を行ない、1933 年版と照らし合わせながら、新たな校訂譜を作成することである。第二の目的は、楽曲分析を行ない、シャイトの声楽作品の様式を明らかにすることである。また作曲年代が近い鍵盤作品集『タブラトゥラ・ノヴァ』への様式面での影響に関する検討も重点課題とする。第三の目的は新たに校訂譜を作成し、校訂譜に基いた演奏実践を行なうことである。演奏実践を行なう声楽家による見解を取り入れることにより、歌詞の付け方、初版譜・現代譜の音の誤り等を修正し、より質の高い校訂譜を作成できる。校訂譜、演奏実践の録音はすべてウェブ公開し、一般に広くシャイトの声楽作品を紹介する。本研究により国内外の合唱演奏団体がシャイトの声楽作品を演奏する際のモデルケースを示したい。

３．研究の方法

(1) シャイト全集第４巻のデジタル画像化

『カンツィオネス・サクレ』が収められているザムエル・シャイト全集第 4 巻 Samuel Scheidt Gesamtausgabe Band.IV（1933 年、ハンブルク）は絶版になっており、日本国内では入手困難である。曲集の全貌を知るためには、ドイツ国内の図書館に依頼し、デジタル画像を入手する必要がある。入手したデジタル画像をもとに、楽曲の編成、構成、記譜法を調査する。また校訂譜作成の際の体裁、レイアウト、音部記号等の検討、歌詞のデータ入力もこれをもとに行なう。

(2) 筆写譜の調査とデジタル画像化

『カンツィオネス・サクレ』のオリジナル譜は 8 冊のパートブック形式で出版されている。17 世紀当時、楽譜は高価なものであり、実際の演奏に際しては歌い手がオリジナル譜から書き写した筆写譜を用いていた。当時の演奏実践を知るうえで重要な資料となるため、現地図書館に赴き、現物調査を行ない、デジタル画像化を行なう。

(3) 歌詞対訳の作成

デジタル画像化した『カンツィオネス・サクレ』をもとに全 38 曲の歌詞のデータ入力を行ない、入力した歌詞をもとに歌詞対訳を作成する。完成した歌詞対訳はすべてウェブ公開し、一般の利用に供する。

(4) 作品研究

本研究においては『タブラチュア・ノヴァ』所収のオルガン作品への影響が考えられる《天にます我らの父よ Vater unser im Himmelreich》SSWV32 と《キリストよ、汝、日にして光なるお方 Christe, der du bist Tag und Licht》SSWV19 の 2 曲を重点的に取り上げ、作曲様式の比較研究を行なう。

(5) 校訂譜の作成

1620 年出版の初版譜と 1933 年の全集版の楽譜とを詳細に比較し、研究協力者である演奏実践者の意見を仰ぎながら楽譜作成ソフトで校訂譜を作成する。なお初版譜については既にデジタル画像がウェブ公開されているバイエルン州立図書館（ミュンヘン）所蔵の楽譜を史料として用いる。ただし楽譜の形状、紙質、大きさ等、楽譜に関する基本的な情報を得るため、現物確認調査も行なう。完成した校訂譜はすべてウェブ上で公開し、一般の利用に供する。

(6) 校訂譜に基く演奏実践と録音

ドイツバロック作品を主たるレパートリーとしている声楽アンサンブルグループに演奏を依頼する。校訂譜に基いた演奏は一般に公開し、その録音はウェブ上で公開し、一般の利用に供する。

(7) 楽曲の伝承に関する調査

『カンツィオネス・サクレ』の筆写譜は東欧圏にも伝わっている。伝承の経緯、筆写譜

の記譜法、写本の構成および内容、楽譜の保存状態に関して現地調査を行なう。

４．研究成果

(1) シャイト全集第４巻のデジタル画像化

ベルリン国立図書館に楽譜資料のデジタル化を依頼する予定でいたが、ドイツ国内の古書店で当該楽譜の現物を扱っていることが判明したため、購入し取り寄せた。本研究の要となる 1933 年版の『カンツィオネス・サクレ』の現物は、それ自体、大きな資料的価値がある。入手した楽譜は全ページをデジタル画像化した。また通常の複写印刷による楽譜資料も作成し、楽曲研究、校訂譜作成のための入力作業に使用した。

(2) 筆写譜の調査とデジタル画像化

ベルリン国立図書館所蔵とスロヴァキア共和国レヴォチャ福音派教会資料室所蔵の『カンツィオネス・サクレ』筆写譜に関して調査を行なった。筆写譜はパート別に五線譜に記されたものと、新ドイツ式タブラチュア（文字譜）で記されたものの 2 種類が存在することが確認された。ベルリン国立図書館所蔵の資料はマイクロフィッシュを閲覧、デジタル画像化して USB に保存し、調査した。一方、レヴォチャ福音派教会の資料はデジタル画像化する設備もないとのことで、現地に赴き、4 冊の写本を閲覧、膨大な数のタブラチュアの中からシャイトの作品を同定する作業を経て、撮影を行なった。筆写譜は当時の演奏実践を知る手掛かりとなる資料である。五線譜で筆写されたパート別の楽譜は、日常的に歌い手が礼拝に使用していたと考えられる。またタブラチュアはオルガニストが伴奏用として、あるいはインタヴォラトゥーラとして演奏する際に使用されたと考えられる。この調査によって、『カンツィオネス・サクレ』の演奏実践のかたちを浮かび上がらせることができた。

(3) 歌詞対訳の作成

《天にまします我らの父よ》SSWV32（全 7 節）と《キリストよ、汝、日にして光なるお方》SSWV19（全９節）の歌詞はドイツ語である。ドイツ語から日本語への歌詞対訳を作成した。この歌詞対訳は、日本オルガン研究会 3 月例会「ザムエル・シャイトの初期複合唱作品『カンツィオネス・サクレ』(1620 年）について―その音楽様式、コラール編曲技法、鍵盤作品集『タブラトゥラ・ノヴァ』への影響―」(2018 年 3 月 3 日、日本聖公会聖パウロ教会）における研究発表および演奏を行なう際に、配布プログラムに掲載した。

(4) 作品研究

本研究においては《天にまします我らの父よ》SSWV32 と《キリストよ、汝、日にして光なるお方》SSWV19 を重点的に楽曲分析した。それぞれ同名のオルガン作品が『タブラトゥラ・ノヴァ』にあり、曲集の成立年代も近いことから、様式の面で関連があるのではないかと考えられたからである。今回取り上げた 2 曲は他の『カンツィオネス・サクレ』所収の作品が単楽章であるのに対し、複数の節(Vers)を持つ、規模が大きい作品である。長い音価のコラール定旋律に対し、シャイトはさまざまな対位法的手法を用いて 2 声から 8 声までの節を作曲している。同様の対位法的手法は『タブラトゥラ・ノヴァ』所収曲にも用いられている。同じ《天にまします我らの父よ》というコラールをもとに作曲された SSWV32 の第 3 節と SSWV104 の第 2 節がほぼ同一作品であるということは既知の事実であるが、他の節においてもカノン、二重対位法など共通した手法が見て取れる。シャイトはコラールという素材を用いて、対位法の可能性を追求しようとした。SSWV32 と SSWV19 で用いた声楽作品における対位法的手法を彼はオルガン作品でも実現しようとしたのである。『タブラトゥラ・ノヴァ』は対位法の手本として出版された側面もあることから、『カンツィオネス・サクレ』の当該 2 曲はその先駆的作品というべきものであることが確認できた。この研究成果は日本オルガン研究会 3 月例会（前出）において、類似点が見られる節の譜例を提示し、さらに実際に演奏することによって、シャイトが描こうとした対位法的世界を「鳴り響く音」として確認することができた。

(5) 校訂譜の作成

校訂譜の作成にあたっては　①1620 年出版の初版譜と 1933 年の全集版の楽譜とを入念に比較して相違点をチェックする、②全集版を土台に楽譜作成ソフトに楽譜を入力し、相違する箇所について検討する、③入力した楽譜を研究協力者である声楽家がチェックし、演奏する上での疑問点と問題点を挙げる、④さらに演奏リハーサルにおいて生じた問題点を検討し、歌詞の付け方、音符の修正を行なう。以上の手順で行なった。実際の演奏に携わる声楽家の見解を取り入れることで、より精度が高い校訂譜を作成することができた。オリジナル譜の現物調査はハンブルク市立／大学図書館で行なった。楽譜の形状、綴じ方、紙質、寸法を調査すると同時に、バイエルン州立図書館の史料との差異の有無についても調査を行なった。この過程で、1620 年の出版譜でありながら、ミュンヘンの史料とハンブルクの史料では音の高さの表記が異なる箇所があることが判明した。当該の楽譜はカントゥス（ソプラノ）声部で、ハンブルクの史料は、ミュンヘンの史料の音の誤りを訂正したものであると推定される。同じ年の出版物ではあっても、訂正版が存在するということを確認できたことは収穫であった。

本研究で完成した校訂譜は《天にまします我らの父よ》SSWV32 と《キリストよ、汝、日にして光なるお方》SSWV19 の 2 曲である。楽譜の体裁を整え次第、ウェブ上で公開し、一般の利用に供する。

(6) 校訂譜に基く演奏実践と録音

日本オルガン研究会 3 月例会（前出）にお

いて、校訂譜に基き、研究協力者である声楽アンサンブルグループによる演奏を行ない、シャイトの複合唱作品演奏のモデルケースを示すことができた。編成は 8 人のヴォーカリストとオルガン通奏低音である。また研究発表演奏に際しては、同じコラールに基くオルガン作品《天にまします我らの父よ》SSWV104 と《キリストよ、汝、日にして光なるお方》SSWV133 の 2 曲も合唱作品と並べて演奏した。当日録音された演奏は、校訂譜とともにウェブ上で公開し、一般の利用に供する

(7) 楽曲の伝承に関する調査

『カンツィオネス・サクレ』の筆写譜がスロヴァキア国内に存在することはザムエル・シャイト総目録（SSWV）に掲載されていたが、当初ブラチスラヴァにあるとされていた写本が、スロヴァキアの東端の町レヴォチャにあることを突き止めるまでには数ヶ月を要した。2017 年 9 月、レヴォチャ福音派教会資料室に赴き、当該史料を調査した。シャイトの作品は 4 冊の写本に、16～17 世紀のイタリアやドイツの作曲家の作品とともに順不同で収められていた。この調査では、①すべて新ドイツ式タブラチュアによる記譜である、②鍵盤楽器で弾くには不可能な 8 声で記されている、③筆跡から複数の筆写者の手によるものである、ということが判明した。タイトルと作曲者名、SSWV 記載の楽譜のインチピットとを照らし合わせながら、『カンツィオネス・サクレ』全 38 曲中、25 曲を同定することができた。その中には SSWV32 も含まれている。しかし SSWV19 については今回の調査では見出すことができなかった。17 世紀、スロヴァキアにはドイツからルター派の移民が相次いだという。レヴォチャ福音派教会もその流れを汲む。これらの写本はドイツからの移住に伴い、一緒に持ち込まれたか、あるいはドイツとの交流が続く中でもたらされたものなのだろう。いずれにしても 17 世紀のルター派教会の礼拝において、『カンツィオネス・サクレ』は重要なレパートリーであったということが確認された。レヴォチャの筆写譜については、8 声のタブラチュアの用途に関する考察、オリジナル譜との照合等の精査は今後の課題である。

本研究では大規模な 2 作品に研究対象を絞り、楽曲研究、そして校訂譜作成、演奏実践を行なった。この 2 作品の研究だけでも、シャイトが卓越した作曲家であり、その対位法的手法を用いて優れた声楽作品を残したことを示すことができたと考える。しかしながら、『カンツィオネス・サクレ』の全容を明らかにするためには単楽章作品の楽曲分析と演奏実践が必要である。本研究を踏まえて、平成 30 年度からは基盤研究（C）18K00242 において『カンツィオネス・サクレ』およびシャイトの声楽作品に関する更なる研究を継続して行なう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

1. 大角欣矢「16～18 世紀のルター派とカルヴァン派における会衆讃美」、『礼拝・音楽研究』第 65 号、2016 年、45～54 頁
2. 鏑木(米沢)陽子「初期バロックの教会音楽家たち―その響き、湧き出る泉の如し―」、『礼拝と音楽』No.172、Winter 号、2017年、28～32頁

〔学会発表〕（計 1 件）

1. 鏑木（米沢）陽子、大角欣矢「ザムエル・シャイトの初期複合唱作品『カンツィオネス・サクレ』（1620 年）について　―その音楽様式、コラール編曲技法、鍵盤作品集『タブラトゥラ・ノヴァ』への影響―」、日本オルガン研究会 3 月例会、日本聖公会聖パウロ教会、2018 年 3 月 3 日

〔図書〕（計 1 件）

1. 大角欣矢「音楽と宗教」（項目執筆）、櫻井義秀・平藤喜久子編著『よくわかる宗教学』ミネルヴァ書房、2015 年、190～191 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

1. 鏑木陽子『CANTIONES SACRAE コラールとオルガン音楽の研究室』http://www.ahirunorgano.jp/
2. 鏑木(米沢)陽子(オルガン演奏とレクチャー、プログラム執筆)「―グレゴリオ聖歌とオルガンの調べ―私の魂は主をあがめ」(2015年7月4日、東京純心大学江角記念講堂)
3. 大角欣矢（教会音楽・神学公開講座講師）「17～18 世紀ルター派における教会音楽

をめぐる諸問題」、(2015 年 9 月 14 日、東京基督教大学教会音楽アカデミー)

4. 鏑木(米沢)陽子（オルガン演奏とレクチャー、プログラム執筆)「コラール合唱とともに味わうオルガン音楽―J. S.バッハ ライプツィヒ・コラール集　Vol.2」（2015 年 10 月 17 日、東京純心大学江角記念講堂）
5. 鏑木(米沢)陽子(オルガン演奏とレクチャー、プログラム執筆)、「グレゴリオ聖歌とオルガンの調べ―フレスコバルディ《聖母のミサ》―」(2016 年 7 月 9 日、東京純心大学江角記念講堂)
6. 鏑木(米沢)陽子(講師)ひらめき☆ときめき サイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI「パイプオルガンわくわく体験」(2016 年 7 月 30 日、8 月 5 日、東京純心大学江角記念講堂)
7. 大角欣矢（教会音楽・神学公開講座講師）「ルター派教会音楽と教会暦（1)」(2016 年 9 月 26 日、東京基督教大学教会音楽アカデミー)
8. 鏑木(米沢)陽子（オルガン演奏とレクチャー)「コラール合唱とともに味わうオルガン音楽―J. S.バッハ　オルガン小曲集 Vol.1」(2016 年 10 月 15 日、東京純心大学江角記念講堂)
9. 鏑木(米沢)陽子（オルガン演奏とレクチャー、プログラム執筆)「歌から生まれたオルガン音楽」(2017 年 6 月 24 日、東京純心大学江角記念講堂)
10. 鏑木(米沢)陽子(講師)ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室～KAKENHI「楽器の女王パイプオルガン（2017 年 7 月 29 日、8 月 7 日、東京純心大学江角記念講堂)
13. 鏑木(米沢)陽子（オルガン演奏)「オルガンコンサート」(2017 年 9 月 13 日、スロヴァキア共和国レヴォチャ福音派教会)
11. 大角欣矢（教会音楽・神学公開講座講師）「ルター派教会音楽と教会暦（2)」(2017 年 9 月 18 日、東京基督教大学教会音楽アカデミー)
12. 鏑木(米沢)陽子（オルガン演奏とレクチャー)「コラール合唱とともに味わうオルガン音楽―J. S.バッハ　オルガン小曲集 Vol.2」(2017 年 10 月 7 日、東京純心大学江角記念講堂)

６．研究組織

(1)研究代表者
鏑木 陽子（KABURAGI YOKO）
東京純心大学・看護学部・教授
研究者番号：10638357

(2)研究分担者
大角 欣矢（OSUMI KINYA）
東京藝術大学・音楽学部・教授
研究者番号：90233113

(3)連携研究者（　　）
研究者番号：

(4)研究協力者
畑野 小百合（HATANO SAYURI）
科野 楓貴子（SHINANO FUKIKO）
木内 涼（KIUCHI RYO）
前田 皓生（MAEDA KOSEI）
櫻井 元希（SAKURAI GENKI）
サリクス・カンマーコア（SALICUS KAMMERCHOR）